

アニメで知る心の世界

こもれ心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：天気の子 4 回目

空想と反逆とエディプスコンプレックス

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

前回主人公、森島帆高の行動は、「キャッチャー・イン・ザ・ライ（ライ麦畑で捕まえて）」の主人公ホールデン・コールフィールドがとった行動と似ており、今までの生活に欺瞞を感じ、そこから抜け出し、大都会に理想を求め、この物語が始まったと述べてきた。それはエディプス・コンプレックスからの逃避であり、儚くも脆く崩れやすいものである。それゆえに理想としていた都会での一人暮らしは叶わず、帆高は仕方なくも須賀への助けを求めた。

そしてそこで出会った人々（陽菜、凪、須賀、夏美この4人）は帆高と同じように心の傷を抱えた人々であり、**現実の喪失や困難を受け入れることができず、万能空想や否認によって現実から逃避しようとする心理構造**をもっており、彼らと交流し、互いに奇妙な形で支え合う中で、帆高は自分自身を見出していくようになる。

II. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く

1) 「ハレ」と「ケ」

「ハレ」と「ケ」とは、柳田國男によって見出された、日本人の伝統的な世界観のひとつ。

- **ハレ:** 特別な日、儀礼、年中行事など、日常から離れた非日常的な時間や空間を表す。例：結婚式、お祭り、正月など。
- **ケ:** 日常生活、普段通りの時間や空間を表す。 例：仕事、家事、私たちが日々を送る中で経験する出来事。

「天気の子」では雨の日がずっと続いていたが、雨は登場人物にとって息苦しさ、孤独感、閉塞感を象徴している。つまり彼らにとってずっと「ケ」の状態が続いていると考えられる。

2) 帆高とエディプス葛藤

帆高は上京後、都会の一人暮らしは叶わず、須賀、夏美との共同生活が始まる。そのシーンでは帆高は日々の活動に追われ、時に須賀に仕事で叱られながらもイキイキとした様に描かれている。

ここに象徴している様に帆高は須賀達に抱えられながらも、一人の対等な存在として扱われる中で、人間らしい生き方を取り戻し、大人への階段を登っていき、エディプス葛藤に向き合う準備となる。

そして上京して、困窮していたときに出会った陽菜と再会する。

帆高は路地裏のホテル内に誘い込まれそうになって陽菜を助け出そうとする。しかしその試みはうまくいかず、チンピラのような金髪の男性が馬乗りになり、帆高は殴打されてしまう。それがこれまで帆高が受けてきたエディプス葛藤の再演のようにも感じられる。しかしその後、帆高は拳銃を殴打（おうだ）する彼に向け、発砲する。

→拳銃は「男性」の象徴であり、殴打され続ける中で拳銃を発砲したことは、帆高がこれまでの自分とは違い、大人達に立ち向かえる力を持っているということを誇示している様にも感じられる。しかしそれは社会的に好ましくない形での誇示である。

帆高の発砲でチンピラが怯んだ隙に、帆高と陽菜は命からがら廃ビルに逃げ込むが、陽菜は帆高が拳銃を使用したことを責める。それは社会的に好ましくない形の誇示であり、陽菜もそして帆高も社会に背いて生きる生き方をよしとしないという現れと考えられる。

その後、帆高が拳銃を投げ捨てたことは、暴力的解決はしないという誓いの象徴である。だからこそ陽菜は帆高に近づき、自らの秘密、彼女が「晴れ女」であることを教え、親しくなったのだろう。

そこで帆高と陽菜は、奇妙な形で互いに希望の光（「ハレ」）の存在へとなり、帆高と陽菜は晴れビジネスを展開していく。

4）陽菜の社会的役割の獲得と自己犠牲と「ハレ」

帆高と陽菜が知り合い、お互い社会に溶け込めないで、同じ境遇の存在を知った喜びは互いにこの上なく、夢のようなものであったであろう。そこで帆高と日向は関係性を深めていくのではなく、昇華するかのように晴れビジネスを展開していく。

そこで陽菜はいう

陽菜：この仕事。晴れ女の仕事。私ね、自分の役割みたいなものが、やっと分かった——
——ような気が、しなくも、なくもなくも、なくもなくもなくもない

この発言から陽菜はこのビジネスを通して自分が社会的役割を持ち始め、充実感を感じ始めている一方で、それでいいのか？という不安が混在した思いを語っているように感じられる。

しかしこの晴れビジネスは場当たり的な発想であり、二人の置かれた困難な状況から目をそらすかのようなものである。一種の現実逃避であり、お互いが抱いてきた孤独感や不安感を否認する躁的防衛のような状況になっているように感じられる。そしてそれは陽菜にとって母の喪失への否認なのですある。

そして陽菜に関して晴れビジネスで瀧くんの祖母富美さんの家に訪れたシーンで母の死に関して人ごとのようにあっさりと会話が終始していたのが印象的であった。以下のボウルビィのいう心理過程に沿って考えるならば、

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

- ①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）
- ②思慕と探求・怒りと否認の段階
（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）
- ③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ体験）
- ④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

①もしくは②の状況のように感じられ、陽菜は母の喪失を受け入れられず、母が生前の頃の生活を今も続けていこうとしているように感じられる。そしてそこで生じる葛藤を無かつ

たことのようにしているように感じられる。

空の上の向こう岸に母が行ってしまったと考えることで、陽菜の母にまつわる情緒的葛藤を排除させ、彼女自身の心を安定させようとしたのかもしれない。

一方で、神社の神主が夏美と圭介に龍の天井画を解説しながら天気の巫女について、人の切なる願いを受け止め、空に届けることのできる特別な人間だと述べている。

晴れ女である陽菜は、まさに巫女のような存在だったと言えるだろう。

以前、番組で『君の名は。』を取り上げた際、主人公の三葉は高校生でありながら宮水神社の巫女を務めているという設定に着目した。巫女とは、神を祀り、神に仕え、神意を世俗の人々に伝える役割を担い、村の人々と神との間を繋ぐ存在、つまり村のアイデンティティの象徴である。吉本隆明は、巫女を「村の共同幻想と融合している」存在と捉えていた。（ちなみにアイドル達はファン達の共同幻想と融合しているように感じられ、アイドルはある種現代の巫女的側面があるのではないだろうか？）

陽菜が晴れ女であり続けることは、「君の名は。」における当初の三葉と同様に、巫女としての生き方を選ぶことである。それは「晴れ女」という超自然的な能力によって、東京の天候という共同幻想的な要請（みんなの願い）に応える存在となり、最終的には「犠牲」として消失することになってしまう。この状況を変えるためには、『君の名は。』の瀧のように、陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、彼女を救い出す存在が必要となる。それが帆高なのである。陽菜と帆高が互いのことを思い抱く幻想、吉本隆明はそれを対幻想と言っている。吉本隆明は共同幻想と対幻想は逆立するというが、精神分析的に言えば、それこそが自我の目覚めなのである。

5) 凧の提案と「ハレ」

しかし帆高は陽菜に対して煮え切らない態度をとり続けている。それで陽菜の弟の凧に帆高は相談するが、その態度に業を煮やした凧との会話シーンを取り上げる。

凧：——指輪だね。間違いない

帆高：え、マジ、いきなり指輪!? え、それって重くない？

凧：誕生日プレゼントだろ、姉ちゃんの？

帆高：うん。他の女の人にもリサーチしたんだけどさ——。一ミリも役に立たなくてさ。……でもそうかー、指輪かあ……うーん……。

凧：——帆高さあ、姉ちゃんが好きなんだろ？

帆高：え？……—えええええっ!? いやいやいや、別に好きとかじゃなくて……え？
いや俺もしかしてそうなのか？ え、いやいやいやいつから？ もしかして最初から？
えええええ!?

凧：あのなあ、はっきりしない男が一番ダメなんだよ

帆高：え、そ、そうなの？

凧：付き合う前はなんでもはっきり言って、付き合った後は曖昧にいくのが基本だろ？

帆高：凧センパイって呼んでいいすか？

凧：——母さんが死んでから、姉ちゃんずっとバイトばっかだし。それはきっと、俺のためなんだ。俺まだガキだからさ

帆高：……

凧：だから姉ちゃんには、もっと青春っぽいことしてほしいんだよね。……ま、帆高でいいのかは分かんないけどさ

【考察】

帆高の煮え切らない態度に凧は単刀直入にアドバイスを送っている。凧自身にとって帆高はよそ者であり、当初は警戒心や不信感を抱いていたように感じられる。しかし晴れビジネスと一緒にするなかで、陽菜、帆高、凧の3人の関係が非常に活気あふれたものになり、信頼関係が生まれ、この関係性が続いて欲しいと凧は感じたと思われる。(陽菜も晴れ女の仕事に自分の役割を感じたと話していたが、もしかしたら、この三者の関係性に居心地の良さを感じたのからこそ、その発言をしたのかもしれない。) だからこそ凧は帆高と陽菜が付き合っただけで欲しいと感じたからこそ、このアドバイスを送ったように感じられる。そして帆高の陽菜のプレゼントに対して凧は即座に「指輪」と答えたが、「指輪」は一般的に永遠の絆、約束の象徴である(一方で帆高が「重くない?」と言ったように指輪は束縛の意味合いもある。そして帆高自身も責任を持つことの怖さがあるようにも感じられる。)。だからこそこの関係が長く続いて欲しいという思い、そして「姉ちゃんには、もっと青春っぽいことしてほしい」と語っていたように、この関係性を続けながらも陽菜が自我を持ちイキイキとした生活を送って欲しいという思いを帆高に伝えているように感じられる。

その後、帆高が陽菜にプレゼントをあげようとしたときに陽菜の秘密が語られる。

帆高：陽菜さん

陽菜：帆高（タイミングがぶつかる）

帆高：あ！ごめん

陽菜：あ、ううん なに、帆高？

帆高：いや……別に陽菜さんこそ、なに？

陽菜：あ、うん——

陽菜：——帆高、あのね

陽菜：私——

陽菜の周りに水が舞っている。次の瞬間に突風が吹き、陽菜の傘と上着が飛ばされてしま
う

帆高：あっ！

帆高：陽菜さん！！

帆高の目の前には誰もいない。遠方から陽菜の声が聞こえる

陽菜：——帆高っ！！

陽菜は街灯より高い場所に浮いていた。その後しばらくして陽菜の爪先がアスファルトに
着くと、そのまま彼女は膝から崩れ落ちてしまう。

陽菜：私が晴れ女になったのはね—— 1年前の、あの日

陽菜：去年、お母さんが亡くなるちょっと前にね—— 私、一人であのビルの屋上に登っ
たことがあるの そこはまるで、光の水溜りみたいだった。雲間から一筋だけ陽が差して
いて、その屋上を照らしてたの。あの廃ビルおん屋上には一面に草花が咲いていて、小鳥
がさえずっていて、朱い（あかい）鳥居が陽射しに光っていて

（回想シーン）陽菜が手を合わせながら鳥居をくぐる。彼女が強く祈る中で雨の音が突然
消え、彼女が目を開くと彼女は青空の真ん中にいた。そこで陽菜は雲の上の草原、そして
キラキラと煌めきながら泳ぐ空の魚達を見る。

陽菜：気づいたら私は鳥居の下に倒れてて、空は晴れてた。久しぶりの青空だったの。あ
の時から私はね、空と、繋がっちゃったんだと思う。

【考察】

このシーンで、なぜ陽菜が巫女となったのか精神分析的に考えていきたいと思う。

「あの時から、私は空と繋がっちゃったんだと思う」

この陽菜の発言は深い心理的意味を含んでいると考えられる。

ウィニコットは躁的防衛の特徴の一つとして、「内なる現実の人々を"生きたまま仮死状態"にしておくこと」を挙げている。陽菜の発言はまさにこの状態を象徴している。晴れ女として万能的な存在となった陽菜だが、実際には母の喪失を受け入れられず、彼女の内的世界において良い母（良い対象）と悪い母（悪い対象）の両方を保持したまま、それらを万能的に支配するという躁的防衛の状態に陥っていたと考えられる。

また、吉本隆明の共同幻想論の観点から見ると、巫女となった陽菜は共同幻想（社会が求める「晴れ」への願望）と自己幻想（母の喪失に対する個人的な防衛）を融合させることで、個としての自我の境界を曖昧にしている状態とも言える。この融合こそが、陽菜の自我の消滅を招く危険性を孕んでいるのである。

この万能的支配により、確かに悪い母を制御することは可能となるが、同時に良好な関係性もすべて停止されてしまう。その結果、陽菜自身の内面が死滅してしまうことになり、これは前述の通り自我の消滅を意味するものである。

陽菜はそのように巫女になることで、「ハレ」を自身で制御するという万能的支配を持つとうとし続けたのだと考えられる。しかし、それは先に述べたように自我の消滅である。

その陽菜を助け出すには、前述の「君の名は。」で瀧が深く三葉の内面に入り込む中で三葉を救い出したように、帆高が陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、彼女を救い出すことが不可欠なのである。